

修士論文概要

障害児の家族活動への参加に影響を与える要因の検討

-ウズベキスタン共和国フェルガナ州の事例から-

20MD0022

大西 海斗

研究の目的と方法

本研究の目的は、ウズベキスタンにおける障害児の家族活動への参加に影響を与える要因を検討することである。

本研究の意義は、障害児の家族活動への参加に影響を与える要因を明らかにすることで、障害児とその家族の日常的な参加の状況理解に貢献することである。

家族活動は、子どもにとっては、日常における重要な学習機会のある場であると同時に、家族とともに社会とのつながりを経験する機会でもある。したがって、家族活動への参加の重要性を理解するとともに、参加に影響を与える要因を検討することは肝要である。

本論では、障害児を取り巻く状況を示すとともに、日常的に行われる家族との活動に焦点を当て、障害児の参加の状況を整理した。

調査方法として、障害児や障害児の家族を取り巻く制度や参加に係る文献調査と障害児の家族への質問紙調査を実施した。第一に、文献調査により対象国であるウズベキスタンの障害児や家族を取り巻く制度や環境について調査した。その際、ウズベキスタン政府によるレポートや基礎データ、及び障害分野の統計資料や調査報告書、論文等に基づき調査を行った。第二に、ウズベキスタン、フェルガナ州にて障害児や家族支援を行う障害児センターである「国立児童社会適応センターフェルガナ支所」の協力を得て、障害児の家族に質問紙調査を行った。対象者が自身の言語を使用することで、詳細な回答やデータを得ることができるよう現地の母国語であるウズベク語を用いて実施した。回答時には、必要に応じて現地のソーシャルワーカーが書字・識字等には必要なサポートをした上で実施できるよう準備したが、今回の調査では、すべて自筆による回答であった。

調査期間は、2021年10月14日から10月20日であり、調査の実施にあたっては、日本福祉大学大学院「人を対象とする研究」に関する倫理審査チェックを実施し、本調査は倫理審査の対象外であることを確認した。

本研究では、障害児のおかれている現状を包括的に捉え、分析するためには、「障害」をインペアメントという個人的次元として障害児本人に帰属させない「障害の社会モデル」と、「参加」の理論的検討を行い、これらを分析の枠組みとして援用した。なお、本論文でいう「障害」は、障害者権利条約で用いられている「障害の社会モデル」に沿った障害概念を用いている。すなわち、障害を個人に起因させ、医学的な治療の対象とする医学モデルの立場とは異なり、「障害者の置かれている不利な状態の原因を、機能障害と社会的障壁の相互作用に求めたうえで、特に社会的障壁の問題性を強調する視点」で障害を捉えている。

論文の構成

第1章 はじめに

- 1.1 研究の背景と問題の所在
- 1.2 研究の目的
- 1.3 研究の方法
- 1.4 論文の構成

第2章 本研究における分析の枠組み

- 2.1 障害の社会モデル
- 2.2 参加
- 2.3 本研究における用語の定義
- 2.4 小括

第3章 障害児の参加に関する先行研究

- 3.1 障害児の参加をめぐる議論
- 3.2 家族をめぐる議論
- 3.3 小括

第4章 ウズベキスタン社会の概要

- 4.1 ウズベキスタンの基本情報
- 4.2 ウズベキスタンにおける家族、家族活動の特徴
- 4.3 ウズベキスタンの障害児を取り巻く状況
- 4.4 ウズベキスタンにおける障害児の参加の状況
- 4.5 小括

第5章 ウズベキスタンにおける障害児の家族活動への参加をめぐる課題

- 5.1 ウズベキスタン共和国における調査概要
- 5.2 調査結果と分析
- 5.3 考察
- 5.4 小括

第6章 結論と今後の課題

- 6.1 総括と結論
- 6.2 今後の課題

引用・参考文献

図表一覧

巻末付録

謝辞

論文の概要

本論文は6つの章で構成している。

第1章では、研究の背景と問題の所在、研究の目的、研究の方法について述べた。

第2章では、本研究の分析の枠組みとして、「障害の社会モデル」と「参加」の概念を採用することを明示し、本論文で用いる用語の定義や捉え方を提示した。本研究では、障害児のおかれている現状を包括的に捉え、分析するためには、「障害」をインペアメントという個人的次元として障害児本人に帰属させない「障害の社会モデル」を分析の枠組みとすることが有用であることを説明した。そして、基本的人権としての「参加」の説明とともに本研究における参加の捉え方を整理した。

第3章では、障害児の参加と家族活動への参加に関する先行研究を整理した。はじめに、参加をめぐる議論として、国際的な潮流を踏まえ、障害児を取り巻く状況を概観し、障害児が置かれている状況について述べた。また、家族をめぐる議論、障害児の家族や当事者、そして家族活動について参考文献から整理し、本研究における捉え方と定義を明示した。その上で、障害児の家族活動への参加に関する先行研究から、家族は参加の機会を提供される中心的な場であること、そして家族活動は子どもにとっては、日常における重要な学習機会の場であると同時に、家族とともに社会とのつながりを経験する機会であることを述べた。家族活動への参加の重要性を理解するとともに、参加に影響を与える要因を検討することは肝要であるものの、多くの研究がなされていないことを述べた。

第4章では、文献研究から明らかにした議論を踏まえ、ウズベキスタン社会の概要を整理するとともに、ウズベキスタン政府の政策や社会サービス、統計データなどから、障害児とその家族を取り巻く状況や特徴について論じた。またウズベキスタンでは、近代化に伴う家族形態の変化とともに、家族制度の発展に向けた取り組みが展開されているが、障害児の家族に対する支援の方向性と実態は明確にはなっておらず、障害児の参加に関する取り組みと研究の蓄積が少ない現状にあることを述べた。

第5章では、調査地の概要と調査結果及び分析結果について述べ、それらに基づき考察を行なった。本調査では、調査期間中にウズベキスタン国立児童社会適応センターに通所していた40家族中、本研究への協力の同意が得られた40家族に調査を実施した。調査内容として、子どもの性別・年齢・運動機能、移動手段、家族形態、回答者の性別・年齢・就労状況等に加え、室内活動、食事、屋外活動、用意/計画された活動、外出に関する項目の5つの活動領域に整理し、質問票を構成した。本調査の結果をもとに、「子どもの年齢」「家族形態」「運動機能」「子どもとの移動手段」「主な移動手段」「外出時の他者の態度や行動に関する経験」から家族活動への参加を分析し、家族活動への参加に影響を与える要因を検討した。そして、家族活動への参加の特徴や参加に与える影響について示した。研究の限界はあるものの、子どもとその家族の日常的な参加の状況を理解する上で貢献するものになったと考えられる。

第6章では、本論の結論と残された課題について述べた。本研究の課題として、障害種別

においては精神障害や視覚障害、聴覚障害についての分析が不十分であることが挙げられる。またフェルガナ州を中心としたウズベキスタンの東部地域 3 州に暮らす家族を対象とし、分析を試みたが、他地域や当センターが対象としていない子どもとその家族の把握に至っていないことも挙げられる。社会モデルを念頭においた研究方針でありながら、子ども、家族、彼らを支援するセンター、そして政府の政策以外の「社会」の分析が不十分であったことも課題である。より地域コミュニティや保育・教育との関係、他者の態度にかかる分析が必要である。今回リストアップした家族活動は、子どもが家族と暮らす日々の生活においてはほんの一部を切り抜いたに過ぎず、カテゴライズできない活動が多々存在する。そのため、今回の調査では測りえなかった、より詳細な議論と分析が必要である。